山本有三『路傍の石』序説

――吾一の立身出世主義――

吉田和佳子

はじめに

山本有三の代表作である『路傍の石』は、国民的小説として戦後長い間親しまれてきた。戯曲家として活躍していた山本有三だが、「兄弟」（「新小説」大正一一年一〇月号）を最初に小説執筆をはじめ、長編小説『波』（東京大阪朝日新聞、昭和三年）の成功をきっかけに小説家としての地位を確立した。これ以後、有三の長編作品は『女の一生』（中央公論社、昭和八年）をはじめとしてベストセラーを記録していく。[注1]

これまで「ドイツ文学系統のヒューマニズム作家」[注2]といわれる有三の作品群は、「人生いかに生くべきかという問題を常に筋の巧みな構成の中に生かして、人間性に対する深い洞察と人生への理想主義的な指針を示している」[注3]ものとされてきた。名作と評されてきたにもかかわらず、近代文学研究において正面から山本有三の作品が論じられることはほとんどなかった。比較的言及が多く見られる『路傍の石』においても、有三の半生と重ねて語られるか、教訓的に言及されるばかりである。「典型的な下層中産階級」であり、家の中にほとんど本のない「およそ文学や学問などとは無縁」であった家庭で、『路傍の石』が「しばしば口のはしにのぼっていた」という鹿島茂のエピソード[注4]からは、本作が膨大な読者を獲得していたことが分かる。昭和期文学のなかで本作をはじめ有三作品は見逃すことの出来ない存在であり、改めてその意味を問わねばならない。本稿では、『路傍の石』の分析を通じ、これまで読み落とされてきた本作の主題を探り、その足がかりとしたい。

一　『路傍の石』成立過程と評価

『路傍の石』の成立過程は複雑である。初出は、昭和一二年一月一日から同年六月一八日、東京・大阪朝日新聞での連載である。朝日新聞で第一部完結を迎えるが、有三の体調不良によって第二部連載が見送られていた。しかし、有三が回復したにもかかわらず、朝日新聞から第二部連載を拒否されてしまう。こ

の時の経緯を、有三は鱒書房『新篇　路傍の石』（昭和二二年三月）の「あとがき」に記している。「（注：朝日新聞での第一部完結の）翌月に突然日華事変が起こったので、軍国主義の思想がいやが上にももりあがり、寺内内閣以来、絶えず軍部からにらまれていた朝日新聞社は、かなり苦しい立場に立ったらしい。そのために、私のような作家の作品を連載することは、危険と思ったものか、自然あとまわしということになり、『路傍の石』の続編は、一年以上たっても掲載される運びにいたらなかった」。

このとき、「主婦之友」が第二部連載に意欲を示したため、今度は「主婦之友」に掲載場所を移し、昭和一三年一一月より、冒頭から書き直す形で「新篇　路傍の石」として連載を開始する。しかし、これもまた朝日新聞版第一部の末尾にいたる前に中断されてしまう。作中の社会主義者である登場人物の言葉に対して、内務省から削除要請がなされたことに有三が反発し、「ペンを折る」（「主婦之友」昭和一五年八月号）を掲載、連載を中断したためである。『山本有三全集　第七巻』（岩波書店、昭和一六年二月）、単行本『新篇　路傍の石』（岩波書店、昭和一六年八月）では、そのタイトルからも明らかなように「主婦之友」連載テクストが採用されている。しかし、戦後になって鱒書房から改めて刊行された単行本『新篇　路傍の石』（昭和二二年三月）は、「主婦之友」連載テクストをもとにしているものの、「実学」の章、一節末尾から、三節冒頭部分が削除された上に繋ぎが加筆され、更に作品末尾も「次野先生」の章で切る形となっている。これは、ＧＨＱの検閲への配慮から作者自身がおこなったものである。[注5]

このため、『路傍の石』は、昭和一二年の朝日新聞連載版、昭和一三年から一五年の「主婦之友」連載版、昭和二二年に鱒書房から刊行された単行本の三種のテクストが存在することになる（以下、本稿ではそれぞれを朝日新聞版、主婦之友版、鱒書房版と呼ぶ。朝日新聞版と主婦之友版の構成は【表】として本稿の後ろに示した）。更に、『路傍の石』は小説にとどまらず、映画化、舞台化、ラジオやテレビのドラマ化が繰り返されており、長い期間にわたり多様な形で繰り返し受容された作品であるといえよう。

現在、一般に手に取ることが出来るテクストは、『定本版山本有三全集』（新潮社、昭和五一年）と新潮文庫（昭和五五年）に収録されている主婦之友版をベースに表記の修正が施されたものであり、これに「付録」として主婦之友版の続きにあたる部分の朝日新聞版が付されている。[注6]これ以前は鱒書房版が一般的に流通しているため、朝日新聞版全体が連載以後読者の手に届くことは一度もなかったとみられる。

こうして成立した『路傍の石』は、下村湖人『次郎物語』と並び、教養小説、児童文学の名作と称されてきた。[注7]苦境に立たされながらも、強い意志を持ち続ける吾一の精神性を中心に評価を得、国民的小説として不動の地位を得た。たとえば、次に示す吉井善三郎の論はその評価の代表的な例である。

吾一を取りまく環境は非常に暗い。すべて貧しさからく

る不条理に嘖まれているからである。それも吾一の全く知らないところで起こされる不条理である。だがこの小説に子どもたちが共感を覚えるのは、「精神一到」「かんなん、なんじを王にす」と口ずさみながら、吾一が自らの強い意志でそこから脱出しようとする意地があるからである。[注8]

関口安義[注9]も同様に、作中の「かんなん、なんじを玉にす」という画学生黒田の言葉を引き、「こういう健康な倫理」があるゆえに、本作が「向日性の物語」であり、「児童文学として位置づけることのできる」ものだとしている。また、山田吉郎[注10]は、「基本的に成長小説でありながら、児童文学としてのまとまりがきわやか」であり、この作品の「原点（あるいは出発点）」が「児童文学的な領域」にあるとして、吾一の小学校時代の子ども同士の関係性に焦点をあてて論じている。これら先行論は、吾一が「かんなん、なんじを玉にす」などといった言葉に励まされながら、逆境に立ち向かう「向日性」を評価し、それこそ『路傍の石』が児童文学たる所以であるとしている。

しかしながら、本作はもともと子ども向けに書かれたわけではない。米村みゆきが「多くの児童文学作品が〈名作〉と呼ばれるかどうかは、当時の情報メディアの雄であった映画の威力の介在と不可分ではない」[注11]と指摘するとおり、昭和一三年に公開された映画『路傍の石』（田坂具隆監督、日活）の大ヒットが、[注12]本作の児童文学化の要因であることは間違いないだろう。米村[注13]によれば、朝日新聞版を原作とし、文部省教化映画第一作として製作されたこの映画は、「学問への志の側面」を強調するために、吾一の家出という中途半端な場面での幕引きになったという。特に、朝日新聞版に見られる大人の人間関係を曖昧にし、吾一の生活を中心としたことは、『風の中の子供』（昭和一二年、松竹）、『綴方教室』（昭和一三年、東宝）など他の児童映画にもみられる「子供の生活苦闘史」を描く特徴に合致するものであり、「時代の要請に見合っていた」。また、地域によっては映画放映と時期を同じくして「主婦之友」での連載が開始されることにより、メディアミックス戦略がとられたことも指摘されている。『路傍の石』は映画化に伴う改変によって児童文学化され、主婦之友版と映画がセットで宣伝される形で普及していったのである。

こうして確立した児童文学としての評価は、吾一の少年時代を物語の中心としている主婦之友版や鱒書房版を基盤に維持されてきた。一方、朝日新聞版は全編を通して読まれる機会は連載時以外にはなく、そのために作品研究においても朝日新聞版が分析の対象になることはほとんどなかったのである。

唯一、朝日新聞版を論じたのは、西谷道子『『路傍の石』論――その変遷と作品分析――』（『立教大学日本文学』第一六号一九六六年六月）である。西谷は、朝日新聞版では吾一の母親おれんを中心とした人間関係が描かれることによって、おれんには「女としての苦悩」がみられるとし、主婦之友版では「母親としての立場の描写が多くみられる」と指摘している。吾一の父親庄吾に関しては、朝日新聞版が「妻と子に迷惑をかけ苦境におちいらせるだけの身勝手な男として描かれている」一方

で、主婦之友版は「父の描写の部分がかなり比重を占めてくると同時に、吾一にとって父は存在は大きくなり、（注：吾一の）内的成長に影響を与える」としている。また、改稿には「吾一の内面的成長に焦点をしぼり、その密度を高いもの」にする狙いがあったと指摘する。しかし、西谷の分析は吾一の上京以前に限られ、それ以後については両テクストを合わせてあらすじを述べるに留まっているために、朝日新聞版について充分な考察を加えたとはいえない。

そこで本稿は、朝日新聞版の分析を試みることとする。朝日新聞版は、吾一が青年となり出版者として独立しかかるところまでが描かれているために、多様な視点によって構成されたテクストであるといえる。これまで単独で読まれることのなかった朝日新聞版を扱うことで、主婦之友版や鱒書房版の下では見えてこなかった『路傍の石』の新たな相貌が浮かび上がってくるはずだ。本稿では、立身出世主義を視点として分析していきたい。なぜなら吾一が如何に立身出世主義を実践していたのかを分析し、吾一の関心の中心を明らかにすることで、『路傍の石』の新たな主題へと接続が可能となると思われるからだ。

二　立身出世主義と朝日新聞版

朝日新聞版『路傍の石』はひとまず、中学進学を断念せざるを得なかった吾一が、仕事をとおして成功をおさめていく過程を描いた立身出世譚であるといえるだろう。朝日新聞連載は昭和一二年だが、物語の舞台となっているのは明治三〇年から四〇年前後、日清戦争後から日露戦争後の社会であり、この時代の立身出世をめぐる多くのトピックが埋め込まれる形で作品は作り上げられている。[注14]

明治を迎えると共に『学問のすゝめ』や『西国立志編』が登場し、広く普及していく中で立身出世主義は醸成されていった。人間には生れ持った身分は存在せず、学問によって富を手にいれることが出来るという能力主義到来の宣言ともいえる『学問のすゝめ』の一節が、明治初期の青年たちの立身出世欲を掻き立てたことは、誰もが知るところである。だが一方で、『路傍の石』の舞台である明治三〇年代という時期は、青年たちの間に閉塞感が漂っていたことも忘れてはならないだろう。というのも、多くの青年が立身出世の欲望を抱きながらも、現実的にはその道が閉ざされていたからである。

竹内洋は、明治における立身出世主義の変化を大きく三段階に分けて説明している。明治一〇年代初期までを「『勉強立身熱』の時代」、明治二〇年代から三〇年代初期までを「学歴資格の『順路』の時代」、明治三〇年代後半からを「受験の時代」としている。「『勉強立身熱』の時代」は、「人材選抜の合理化が不十分であり、具体的な上昇移動経路が不透明だった」ため、「極めて抽象的に能力（勉強）主義社会の到来が信じられ表出された時代」であった。加熱する立身出世欲を、青年たちは「勉強立身言説」や「政治天下熱」として発散させていた。[注15]だが、明治一九年には帝国大学を頂点とした学歴秩序が完成され、明治二〇年に官吏の任用試験が設けられるとともに、立身出世の

ルートが明確に定まることとなる。「学歴資格の『順路』の時代」の到来である。これにより、立身出世とは現実的に学歴ルートを辿ることでしか達成されないものとなり、高等教育機関の入学試験突破が青年の関心の中心へと変化する。

それまで、立身出世言説を享受したのは士族出身の限られた層であったが、明治二〇年代後半からの小学校就学率の急上昇により、上級学校に進学したくても出来ない者が増加する。これを竹内は「高等小学校現象」と呼んでいる。「学校化によって勉強立身の『目標』を内面化させられながら上級学校進学のための『手段』を欠いたブロッキング状態による鬱屈」が発生するのが明治三〇年代であった。[注16]

こうした閉鎖的な状況を背景に起こったのが、明治三五年に創刊された雑誌「成功」が牽引した成功ブームである。「成功」はますます上昇する立身出世欲の発散の回路として、新たに実業や殖民を読者に奨励していった。[注17] 日清戦争後には、立身出世は官僚主義に限らず、実業での金銭主義的出世も青年たちにとって魅力的な道として示されていたのである。[注18]

朝日新聞版『路傍の石』から、こうした時代状況を読み取ることは容易だ。例えば、慶応義塾塾生であったのに家庭の事情（恐らく父の死により書店を継がなくてはならなくなったこと）により学問を断念した泰吉（安吉：以下括弧内人物名は、対応する主婦之友版の人物名）は、吾一に『学問のすゝめ』第一編を薦める。吾一もまた、それを読むことで、能力主義に惹かれていく。こうして中学進学を望んだ吾一が進学を断念せざるを得ない状況は、「高等小学校現象」そのものである。また、作品末尾では、吾一が自ら雑誌「成功の友」を出版しようとするところが描かれるが、これは吾一の実業における一定の成功を意味し、さらなる成功も予感させる点からいっても、明治三五年以後の成功ブームを反映したものであることが明らかである。

このように、吾一の歩んだ道は明治期の青少年たちの大半が直面した状況と照合することができる。竹内洋は『日本人の出世観』（学文社、昭和五三年一月）のなかで、ルサンチマンが立身出世主義の動機づけとして大きく働いていたことを指摘し、その例として『路傍の石』の吾一を挙げているが、吾一の立身出世主義を駆動するルサンチマンは、実際どのように描かれていただろうか。まずは、その出発点である吾一の小学校時代を読み解いてみよう。

三　「はね返してやろう」――金銭と言葉

見下げられてる！

何がいやだといって、これくらゐ、たまらないものはない。しかし、おれはしょっちゅう、見下げられてゐるんだといふ考へが、彼の頭には、こびり付いてゐた。おとっちゃんは内にゐないし、おっかさんは内職をしてゐる。そして家は路地のなかだ。そんなことを面と向かっていふものはなけれども、誰かゞ、どこかで、そうといってゐるやうな気がして、仕方がないのだ。だから彼の小さい体の中には、事々にはね返してやらう、はね返してやらうとする精神が、

常に燃えてゐた。[注19]

小学校時代の吾一のルサンチマンは「はね返してやろうとする精神」として語られている。それは、「おぬひちゃんは、あんないゝ内に生れたのに、自分は露地のなかのやうなところで生れたことがくやしくてならなかった[注20]」と語られるように、同級生で、大店の呉服店伊勢屋の息子である麻太郎（秋太郎）と、その妹おぬひ[注21]（おきぬ）との経済的格差を感じることで生れるものであった。

ところで、吾一の貧しさの根本的原因として示唆されているのは、父親の存在である。父の庄吾は留守がちで、何かにつけおれんに暴力を振るう。泰吉から吾一の学費出資をもちかけられても、庄吾はそれを拒絶してしまう。ここでは、父親が妻子から金銭を奪い続ける形でしか、その権力を発揮できないことが描かれている。こうした父親に対する吾一の見方も当然厳しいものであった。「『おとっつあん』といふ言葉を聞いても、彼はいま、彼の姿を思ひ出すことが出来ない」。これは、庄吾が家に姿を見せないためであるが、その後にはこのように続けられている。「第一、おっかさんにお金を少しも送って来ないのだから、そんな人はおとっつあんのやうな気がしなかった[注22]」。

吾一は、父親に自分たち母子に生活費を送ることを第一に要求しているのである。そうした役割を果さない庄吾は、吾一から〝父親失格〟の判定を下されたといっていいだろう。そして、父親の代役に名乗りをあげたのが、大家でもある稲葉屋書店店主泰吉である。泰吉は家賃や学費を肩代わりし、おれんに自分との再婚を提案していた。本来的には、経済的に妻子を支える役割を期待される父親が、徹底して金銭を奪っていく存在であったために、泰吉によって父親交代が試みられたのである。[注23]しかし、それは果されないまま、おれんは自殺をしてしまう。おれんの葬儀で吾一は、泰吉に対して親しみを表している。朝日新聞版における父庄吾とは、吾一の期待する父親の役割を拒否し続けながら、父の権力を暴力的に振りかざす存在となっているのである。

父の横暴により極貧生活を強いられ、同級生との格差にコンプレックスを抱いていた吾一が、その状況への対抗策として取った行動の一つが、働くことであった。経済的に中学受験が不可能な吾一は、母親の内職を手伝うことで金銭を稼ぎ、それを学費に充てれば、麻太郎と同じように中学受験が出来ると考えたのである。この時点で、中学進学は吾一にとって立身出世の手段というよりも、それ自体が目的化されたものであるといえる。勿論、状袋貼りの内職を手伝ったところで、現実的な解決となるはずもなく、こうした吾一の金銭感覚は未熟というほかない。だが、ここで重要なのは、吾一が中学進学をめぐる現状を「はね返す」ためには、何よりも金銭が必要であるという認識に至っている点である。ここで既に、吾一が金銭主義的立身出世を辿ることが示唆されているのである。

だが繰り返すように、小学生である吾一が実際に金銭を稼ぐことで中学進学を果たすことは不可能である。それでは、少年

時代の吾一はどのようにして常に感じる侮蔑を「はね返そう」としたのであろうか。それは、『路傍の石』の代名詞でもある吾一の鉄橋ぶら下がり事件とその発端に見出すことが出来る。

事件の発端は、「精神一到何事か成らざらん」の章[注24]にある。正月に伊勢屋の空地に建てられた松小屋は子どもたちの溜まり場であった。おぬひによって松小屋に招きいれられた吾一は、その中で繰り広げられる武勇伝に耳を傾けていた。と、不意に同級生の咲二から、「おめえにも、なんかあるかい」と問われる。以前中学に行けないことを咲二にからかわれたことのあった吾一は「意気地のない返事」をすることが出来ない。思わず、「おれにだって、少しぐれえ冒険は出来るよ」と言い返した吾一は、鉄橋にぶら下がったと、皆が驚くような武勇伝をでっち上げてしまう。結局、吾一は自ら発した言葉が嘘ではないことを証明するために、本当に鉄橋にぶら下がらざるを得なくなってしまう。吾一は常に、自分を見下げる相手に対して、より強力な言葉を返そうとする。言葉のインパクトを優先するあまり、思わず虚構を語ってしまったのである。その結果、それが本当であることを現実的な行動で証明する必要に迫られるのである。

本節の冒頭で示した引用の続きはこうである。「彼が学校で一番になってゐるのも、一つはそのはね返してやらうが、彼を一番にさせてゐるのだった」。松小屋の中のような意地の張り方は、吾一が学校で一番であることの原動力となっていたのである。

登校時に独り麻太郎を待っていたために遅刻してしまい、罰として教室に立たされている鏡造（京造）を前にした吾一は、気まずさを感じる。だが、修身の時間に先生からの質問に答えられたことから、「『でも、今のような答え、きさまにできるかい。』吾一はそういう目で、向こうを見かえした[注25]」。このように、吾一の勝敗の意識は、先生の問いに正しく返答できるかどうかに基準が置かれていることがわかる。学校で一番であること、友達同士の会話の中で自分の体面を保ちながら応答することは、吾一にとって周囲の見下すような視線を「はね返す」最大の方法であったのだ。だが、鉄橋ぶら下がり事件とは異なり、教室での吾一の言葉の裏づけとなっていたのは、次野先生である。次野先生から教わった言葉を忠実に再現していくことによって、吾一は誰よりも優秀な成績を修めることが出来るのである。その意味で、次野先生の言葉は吾一にとって絶対的なものであったといえよう。次野先生の言葉を守る限り、吾一の教室での地位は安定している。だからこそ、吾一は麻太郎を待つことなく、時間通りに教室に居ることを選択したのである。

したがって、一度学校を辞めてしまった吾一がその地位を保つことは困難となっていく。伊勢屋に奉公に出た吾一は、風呂の沸かし方も伊勢屋で使われる安物を意味する「ロジアン」というジャーゴンも分からない。ここでは常に主人や番頭の言いつけに対して行動によって応えなければならないにも関わらず、吾一にはそれが出来ない。更にいえば、言いつけに先立って正しい答えや方法を教えてもらうことすら許されないのである。吾一が伊勢屋の中で優遇されるようになったのは、麻太郎

の中学の宿題を正しく解いたことによってだが、問題の解き方がわからなくなると同時に再び元の位置へと戻されてしまう。

少年時代の吾一は、鉄橋ぶら下がり事件からはじまり、言葉通りの行動を示すことに失敗している。逆説的にいえば、現実的な行動を伴う返答をすることで、他人に対抗することが可能な世界であるといえよう。裏づけのある有効な言葉を発しコミュニケーションを成立させたとき、吾一の身分は担保されるといっても過言ではない。その数少ない成功体験が、小学校で首席となることであったのだ。そうした点から言えば、上京後吾一が次野先生宅でおぬひと再会した場面[注26]は決定的であっただろう。夜学に通い始めたばかりの吾一には、英語の指導を仰いでやってきたおぬひと次野先生の会話はさっぱり理解することが出来ない。帰り道でも、おぬひから会話を拒まれてしまう。これは、おぬひとの会話の非対称性が、歴然とした学歴格差と連動して吾一に自覚される出来事であったのではないだろうか。

吾一の身分の低さは、単に経済的なものとして自覚されるだけでなく、コミュニケーションのなかでより切実に迫ってくるものであったのだ。このことは、吾一の「発憤」の動機からもうかがうことができる。

四　身分と呼称

画学生熊田の「時代の主人になれ」という言葉に感化され、吾一が父の妾宅から家出をしたのは「発憤」の章[注27]でのことである。主婦之友版では、この家出に先立って、吾一は伊勢屋から出奔し上京するが、朝日新聞版においては吾一の上京は彼の意思とは関係のないものとして描かれる。おれんのスキャンダルによって暖簾に瑕が付くと考えた伊勢屋が、東京の染物行商の京屋に吾一を引渡したことで、結果的に上京を果たすのである。つまり、朝日新聞版での吾一の家出は、久美田家（住田家）を出るときに限られており、この時の吾一の決断の大きさを物語っている。

「発奮」[注28]という語は、明治期に出版された多くの立志伝においてもキーワードとして登場していた。竹内洋[注29]は『東西名士発奮之動機』（実業之日本社編、一九一〇年一二月）を引いて、立志伝における「外発的な発奮」の重要性を指摘している。立志伝を駆動するのが「発奮」なのだ。『路傍の石』では、「はね返してやる」精神にも見えるように、小さな「発憤」が繰り返されているともいえるが、その中で最も重要な契機として位置づけられているのが吾一の家出なのである。その動機は一体どこにあったのだろうか。

「発憤」の章では、下宿の画学生熊田が「時代の声を吠えるんだ。おれたちは番犬じゃねえ、飼い犬じゃねえ。時代の主人として吠えようっていふんだ」と語る。「時代の主人」という言葉は、「吾一の胸にぴいんときた。はっきりした意味は分からないが、年中こき使はれてばかりゐる彼は、何とかして一度『主人』といふものになって見たいと、猛烈に思った」。しかし、久美田家での生活は「時代の主人」とは程遠いものであった。学校に通うことも許されず、小僧として酷使され続ける、いわ

ば奴隷と同様の生活である。吾一の家出とは、「時代の主人」となるために隷属状態から脱出することを意味する。

この隷属状態とは、単に吾一が小僧として使われることとして描かれるだけではない。吾一の身分は、彼の呼び名と大きく関わるものとして描かれているのである。

鉄橋ぶら下がり事件の後、次野先生が吾一を励ます場面[注30]は、師弟愛を象徴する場面として受け容れられてきた。次野先生は「われはひとりなり、われはこの世にひとりしかいない」という意味が、「吾一」の名にあることを言い聞かせ、それによって彼に「その名まえを、立派に生か」すようにと諭す。

ここで確認しておきたいのは、吾一の名前に「われはひとりなり」という意味が次野先生によって付与されることで、かけがえのない価値あるものとして吾一に結び付けられたことである。次野先生の教えにより、吾一は自分の名前を単なる呼び名に留まらない価値あるものとして捉えなおし、それを誇りとして守ろうとするのである。吾一の名前は一種の財産であるということもできる。

しかしながら、伊勢屋へと奉公へ出されたとき、いとも簡単に吾一の名前は彼から剝ぎ取られてしまう。「五助」という「急に雲助と親類のやうな名前」をあてがわれたとき、彼は「(注：吾一という)そんないい名まえを、親にさへ一言の相談もなく」変えられたことを、「ひどく、なさけない[注31]」と感じている。この呼び名の変化とは、吾一が家庭の中のたった一人の子供であることから、伊勢屋の奉公人の内の置き換え可能な一人へと立場を変えたこととも連動している。名前を奪われた吾一は、「今よりも、もっと苦しいことであっても、いゝから、生れた時につけてもらったとおりの名まえで、――吾一は吾一として、生きて行きたい[注32]」と、自らの名前を取り戻すことを第一に考えるのである。

久美田家へとやって来た吾一は、ただ「小僧」と呼び捨てられるだけとなる。伊勢屋では辛うじて五助という「固有名詞」を持っていた吾一だったが、ここに来て「普通名詞」へと転落する。次野先生から与えられた「われはひとりなり」という価値と同時に、「固有名詞」すらも奪われたことによって、彼の「固有」性は二重に否定されたといっていい。吾一の「発憤」とは、名前を通して個人の尊厳が損なわれたことを動機として発揮されているのである。

吾一は小僧として働く中でも、自身の名前によって身分の変化を感じ取っていたといえる。こうした呼称の問題は、他者からだけでなく、自分自身がどのような一人称を使用するかという点まで意識されている。

吾一は思はず僕といってしまった。夜学に通ふやうになってから、彼はとき〳〵僕といふ言葉を使ふやうになってゐた。彼はこの言葉をどのくらゐ使いたいと思ってゐたかしれない。ある意味からいったら、彼が今日まで歩いてきたのは、「僕」といふ代名詞を使ひたいと思ひながら、使へなかった歴史ではないか。何だ。バカ〳〵しい。「僕」といはうと、「わたし」といはうと、そんなこと、たいし

た違いはないぢゃないかと、普通の人はいふかもしれないが、「手前」といふ言葉をしひられてきた少年にとっては、――たかだか「わし」か「わたし」しかいへなかった少年にとっては、「僕」といふ代名詞は、たとへやうもなく高貴なものだった。その文字の本来の意味はどうであれ、その言葉の響き、その言葉の自然にかもし出す学問的、ぶんかてきな薫りといふものは、何にも増して、あこがれの的だった。「僕」といふ言葉を使ふと、彼は何だか高い階段の上に上ったやうな気持ちがするのだった。

彼はもう五助ではない。文選工の見習でも伊勢屋の小僧でもない。おぬひの前で「僕」といったのは、われながら、よかったと彼は思った。[注33]

ここで吾一の半生は、自らの名前を不当に奪われた彼が、「僕」という一人称を獲得する〈上昇〉の「歴史」として捉えなおされているのである。

「発憤」した吾一は、活版印刷所への就職を果たすことで、賃金を得て身を立てる現実的な手段を得ることになる。それまでの奉公先とは異なり、初めて吾一は運用可能な金銭を手にすることが可能な環境に身を置くことになるのである。こうして吾一は、「はね返す」ための現実的な手段として労働を手にするが、この労働とは、吾一が求めた〈ことば〉と金銭を一挙に手に入れる方法でもあったのだ。

お弔い稼ぎのお清ばあさんに本を読んで良いかと尋ね、「文選」という言葉に惹かれて就職したように、常に吾一は〈ことば〉を得ようとしていた。その方法の一つが就学であり、現に夜学に通うことで「僕」という一人称を獲得した。だがそれと同時に、吾一はジャーナリズムでの労働を通じて、金銭と共に〈ことば〉を得ていく。印刷所で活字を拾い日給を得、速記を身につけることで転職を果たす。「成功の友」出版に際しては、彼の速記記事が資金源であった。吾一の成功は、まさしく〈ことば〉を収集し、文字通り資本へと換えることによって成し遂げられたのである。また、次野先生の「名前を立派に生かせ」、熊田の「かんなん汝を玉にす」や、老人の「うんと働かなくっちゃいけないよ」という〈ことば〉は、吾一がそれを糧としたという意味で、成功を導く〈資本〉となっている。[注34]朝日新聞版では、二重に〈ことば〉が〈資本〉化している。

こうして吾一は出世の階梯を昇っていくが、彼の〈ことば〉の〈資本〉化とはどのようにしてなされたのか。或いは、そうした吾一のありようとは、連載当時の昭和十年代という時代のなかで、一体どのような意味をもつだろうか。

朝日新聞版に見られるこれらの問題は、長い間児童文学として教訓的に読まれてきた『路傍の石』の新たな評価の可能性を示している。本作の持つ〈ことば〉の問題について今後更なる考察を加えていきたい。

注

1 塩澤実信『定本ベストセラー昭和史』（展望社、二〇〇二年七月）

2 小松伸六「向日性の作家、山本有三」（『定本版　山本有三全集第七巻』付録　新潮社、昭和五一年八月）

3 浅井清「山本有三」（伊藤整編『鑑賞と研究　現代日本文学講座　小説5』三省堂、昭和三七年四月）

4 鹿島茂「ヨーロッパ近代文学と山本有三」（「三鷹市山本有三記念館館報」第三号二〇一〇年六月）

5 『定本版　山本有三全集』第九巻（新潮社、昭和五一年六月）の「解説」によれば、「実学」章の削除と加筆は、「条約改正以前の外国人が日本人に対しどんなに横暴にふるまったかを描いているので、敗戦後まだ外国の占領下にあっては、検閲が通らないので、はぶかれた」。また、末尾についても「『次野先生』のすぐあと、『日本はどこにある？』の章のはじめで、北清事変における侵略的な諸外国の軍隊のだらしなさと日本軍のすがらしさが対照的に叙述されている」ために、検閲に引っかかる心配があった。

6 西谷道子「『路傍の石』論――その変遷と作品分析――」（「立教大学日本文学」第十六号一九六六年六月）には「現在出版されている『路傍の石』は、章の構成、内容は岩波版全集と同じであるが、終りの部分が「次野先生」の章で終っている」とあるので、この時点で一般的に流通しているテクストは鱒書房版であると考えられる。

7 森本穫「日本的教養小説」（『講座昭和文学史』有精堂、昭和六三年八月）は、「昭和一〇年代の児童文学を考えるばあい、無視することの出来ぬ二人の作家がある。山本有三と下村湖人である。その代表作『路傍の石』と『次郎物語』が少年少女を中心に、国民の圧倒的多数の支持を受けたことによって、二人は狭い文壇の枠を越えて、大きな影響力をもった」と、紹介している。

8 吉井善三郎「『路傍の石』再読―不条理と意地の児童文学として―」「城南国文」第八号一九八八年二月

9 関口安義「『路傍の石』と『戦争とふたりの婦人』――大戦前夜の有三児童文学――」三鷹市山本有三記念館編『大正・昭和の〝童心〟と山本有三』笠間書院二〇〇五年一〇月

10 山田吉郎「山本有三『路傍の石』の構造――子ども社会への視角」「解釈と鑑賞」二〇〇八年六月

11 米村みゆき「『路傍の石』と文部省教化映画――出世ならざる吾一の〝出世譚〟」（岩本憲児編『日本映画とナショナリズム1931-1945』森話社　二〇〇四年六月）

12 映画『路傍の石』（田坂具隆監督、日活）は、東京帝都座四週連続続映という昭和十三年の邦画最高記録を打ち出している。

13 米村みゆき前掲論文

14 竹内洋『立志・苦学・出世―受験生の社会史―』（講談社、

一九九一年二月）を参照。

15 竹内洋「勉強立身から順路の時代」前掲書

16 竹内洋「苦学と講義録の世界」前掲書

17 竹内洋「日露戦争前後の成功ブームとその変容」（『日本人の出世観』学文社、一九七八年一月）を参照。

18 E・H・キンモンス「成功青年」（『立身出世の社会史』玉川大学出版部、一九九五年一月）

19 「精神一到何事か成らざらん」（七）（「路傍の石第一部」第二二回『東京朝日新聞』昭和十二年一月二三日付、朝刊）

20 「精神一到何事か成らざらん」（二）（「路傍の石　第一部」第十七回、『東京朝日新聞』、昭和一二年一月一八日付、朝刊）

21 朝日新聞版では、吾一が「見下される」要因は貧しさ以上に、母親のスキャンダルであったと思われる。世間が興味本位に噂話をしていることは、咲二（作次）が意味ありげに泰吉の名前を出し吾一をからかっていることからも明らかである。しかし、吾一は噂を認識しておらず、自分の貧しさのみを意識している。

22 「中学志望」（八）（「路傍の石　第一部」第八回、『東京朝日新聞』昭和一二年一月九日付、朝刊）

23 勿論、泰吉がおれんに好意を寄せていたことは見逃せない。吾一の学費出資を既成事実として、おれんが結婚を拒絶するのを防ぐことが目的だったと見ることは充分可能である。泰吉にそこまでの意図が無いとしても、学資支援はおれんにとって大きな抑圧として感じられたことは間違いない。おれんの自殺は、庄吾のみが原因というわけではない。

24 「精神一到何事か成らざらん」（一）～（一一）（「路傍の石　第一部」第一六～二六回、『東京朝日新聞』昭和一二年一月一七日～二七日付、朝刊）

25 「中学志望」（三）（「路傍の石　第一部」第三回、『東京朝日新聞』昭和一二年一月四日付、朝刊）

26 「懸賞文」（七）（「路傍の石　第一部」第一〇二回『東京朝日新聞』昭和一二年四月一四日付、朝刊）

27 「発憤」（一）～（八）（「路傍の石　第一部」第六七～七四回『東京朝日新聞』昭和一二年三月九日～一六日付、朝刊）

28 「発憤」の別表記であり、『日本国語大辞典　第二版』には、見出しにふたつが併記されている。明治期に刊行された立志伝は主に「発奮」の字を使用している。

29 竹内洋「立身出世主義の構造」（『日本人の出世観』学文社一九七八年一月）

30 「吾一」（五）（「路傍の石　第一部」第四一回『東京朝日新聞』昭和一二年二月一一日付、朝刊）

31 「前垂」（二）（「路傍の石第一部」第四四回『東京朝日新聞』昭和一二年二月一四日付、朝刊）

32 「前垂」（七）（「路傍の石　第一部」第四九回『東京朝日

新聞』昭和一二年二月一九日付、朝刊）

33　「懸賞文」（六）（「路傍の石　第一部」第一〇一回『東京朝日新聞』昭和一二年四月一三日付、朝刊）

34　和田博文「〈立志小説〉と読書モード―辛苦という快楽―」（『日本文学』四八巻二号、一九九九年二月）は、成功雑誌社から刊行された堀内新泉の「立志小説」を分析し、「資本を欠いた者が上昇していく」困難な物語を成立させるために、「金銭ではなく、身体や精神、さらには社会関係や男性性といったものを資本として動員するという表現の形をとる」と指摘する。本作はこれを巧みに転用したといえる。

表　朝日新聞版と主婦之友版の構成

朝日新聞版（「路傍の石　第一部」）	主婦之友版（「新篇　路傍の石」）
	口絵のかはりに
中学志望	中学志望
（中学志望）	その夜のことば
実学	実学
精神一到何事か成らざらん	意地
赤い糸	赤い糸
吾一	吾一
	先祖と家がら
	うつりかはり
前垂	前掛け
（前垂）	やぶ入り
	人質（単行本では「物価とうき」）
よこしまの道	
東京	東京
発憤	ダルマさん、ダルマさん
文選見習	かんなん汝を玉にす
（文選見習）	いひわけではランプはつかない
次野先生	次野先生
懸賞文	日本はどこにある
学校騒動	学校
（学校騒動）	嵐のあと
五十銭銀貨	五十銭銀貨
お月さまはなぜ落ちないのか	お月さまはなぜ落ちないのか
働け働けそしてはたらけ	
一寸法師	
意外な来客	
入社の蔭に	
独立自尊	
「成功の友」	

※朝日新聞版と主婦之友版における大まかな対応を示した。また、改稿により対応箇所がない場合は斜線とした。